

ISSN 2189-9290

The University of Aizu
Center for Cultural Research and Studies
Annual Review No.25, 2018

会津大学文化研究センター
研 究 年 報

第25号

2018



会津大学

2019年3月発行

目次

	Page
巻頭言	
・文化研究センターの活動報告	苅間澤 勇人 1
追悼文	
・吉良洋輔先生の安らかなお眠りをお祈りいたします	苅間澤 勇人 3
・吉良先生の突然のご逝去を悼んで	青木 滋之 4
定年退職を迎えて	
・4月からルーキーですー定年退職のご挨拶ー	菊地 則行 5
・退職のご挨拶	青木 滋之 6
特集 「アカデミックスキル1の実践と教育効果・評価」	
1. はじめに	苅間澤 勇人 9
2. 教養科目アカデミックスキル1の概要	菊地 則行 11
3. 教養科目アカデミックスキル1における学生の自己評価と授業実践	蛭名 正司 19
4. 論理的思考教育を基礎とするパラグラフ・ライティングの段階的指導 ー実践報告1	菊地 則行 29
5. 長めの論証文作成に力点を置いた授業ー実践報告2	青木 滋之 43
研究論文	
・あいづっこ宣言から見えてくる日本人の哲学 ー「あいづまちなかキャンパス」参加者の声ー	青木 滋之 51
・2018年度会津大学新入生の生活と意識1	中澤 謙 73
・2018年度会津大学生の生活と意識1	中澤 謙 101
研究・教育・活動報告	
・青木 滋之	155
・蛭名 正司	156
・苅間澤 勇人	157
・菊地 則行	158
・清野 正哉	159
・中澤 謙	160
・長谷川 弘一	161

【巻頭言】“変化”し始めた文化研究センター

—2018年度活動報告—

文化研究センター長 荻間澤勇人

2018年度は、“文化研究センターの変化”を助長する一年でした。変化の一つは、教官が替わりました。4月から教授学習の心理学が専門の蛭名正司先生が着任されました。この人事は、2019年度からの新しい教職課程のための課程認定審査に関わり、2018年度と2019年度の教官を変えないで申請することを狙ったものです。この申請により、事務作業が大幅に軽減されました。一方で、2018年3月末日をもって本学を去られる教官がいらっしゃいます。お一人は、主に教職課程を担当され心理学がご専門の菊地則行先生です。菊地先生は26年間勤務され、永年勤続の表彰をされました。また、文化研究センター長も4年間務められました。今年度末に定年退職されます。本学及び本センターに大きな御功績を残されました。長年のご勤務、お疲れさまでございました。もうお一人は、科学史・科学哲学がご専門の青木滋之先生です。青木先生は本学に約9年半勤務されました。文化研究センターでは初年次ゼミ係を担当され、初年次ゼミの実施に向けてご尽力くださいました。2019年4月からは中央大学にご勤務されます。菊地先生と青木先生のますますのご活躍を祈念いたします。

そして、悲しい出来事がありました。吉良洋輔先生が9月16日に故郷の大分県で、海での事故によってご逝去されました。9月19日の葬儀には、大学を代表して荻間澤が参列してお別れをしました。2016年10月の着任から約2年間、仕事と生活にバイタリティーをもって取り組んでくださいました。お亡くなりになったことがいまだに信じられません。文化研究センター一同、ご冥福を心よりお祈りいたします。

前述の3名の教官に代わる教官の選考が行われました。そして、哲学・科学史をご専門とされる網谷祐一先生、社会学をご専門とされる池本淳一先生、経済学をご専門とされる小暮克夫先生が2019年4月から着任されます。新しく着任される先生方が文化研究センターに新たな風を吹かせてくれるだろうと期待しています。

変化の二つ目はカリキュラムの変更です。2017年度まで「文章表現法」を開設しておりましたが、内容をリニューアルして「アカデミック・スキル1」「アカデミック・スキル2」という科目が基本推奨科目として開講されました。本センターの職員全員が担当し、教養教育を担う本センターが最も力を入れる科目として設定しました。しっかりと成果が出るように取り組んでいきたいと思えます。

また、2019年度のカリキュラムの準備も行いました。新しい教官が担当する科目を新設しました。具体的には、「哲学（英語）」「地域開発論」「地域社会学」です。その他に、本学開設以来、「美術学」の指導を懸田先生にお願いしておりましたが、2019年度から、マイケル・コーエン教授にお願いすることになりました。また、「経済学（英語）」の指導については、澤亮治先生（筑波大学）にお願いしていましたが、2019年度は小暮教官が指導します。したがって、先生の授業は2018年度が最後となりました。

変化の三つ目は、うれしいお知らせです。9月末に中澤謙先生が博士（保健学）を新潟医療福祉大学から授与されました。一緒に働く仲間としてとてもうれしく思います。5年程前から博士課程に通学して論文執筆を続けられたとのことでした。その努力の成果が実っての学位取得です。今後、ますますのご活躍を期待いたします。

変化の四つ目は、荻間澤が教授に昇任し、文化研究センター長をお引き受けしました。2018年度は、菊地先生のご指導のもと仮免許で路上運転し、障害物が多く曲がりくねった道を運転したという感じでした。例えば、4月のカリキュラム編成への対応、アカデミック・スキルの実施、2019年度カリキュラムの非常勤講師の変更、教官の逝去、教官の採用等々です。また、教授会、部局長会議、教育審議会、幹部会などの会議が増え、時間管理も苦労しました。菊地先生がよく「お風呂に入っているときに、センター運営のことを考えて、いろいろなヒントが出てくる」とお話しされていたりしましたが、確かにそのとおりで、1年間、お風呂の中で“次はこれ、その次はそれ、そして、……”とやるべきことを確認しながら、アップアップしながら運転した1年でした。自分ではがんばったつもりですが、2・3月になって体調を崩し、思うように運転できなくなりました。センター長の仕事は周りでみていた以上に大変だということを体験してみて初めて理解しました。4年間もセンター長を務められた菊地先生にあらためて敬意を表するとともに深く深く感謝いたします。

最後に、新年度に向けて。新年度は新しい先生方を3名迎えます。センター長の私は、指導教官が隣にいない状況で車を運転します。運転のうまいか下手かは脇におき、今まで以上に責任をもって運転したいと思います。障害物のない直線であれば、スピードに気をつければ大きな事故は起こさないでしょう。なるべくなら障害物の少ない直線を見つけて運転したいと思います。2018年度は、大きく揺れる車に乗ってくださり、ありがとうございました。2019年度はもう少し揺れないように運転しますのでご乗車の程、よろしく願いいたします。

【追悼】

吉良洋輔先生の安らかなお眠りをお祈りいたします

文化研究センター長 荻間澤勇人

本学文化研究センター、准教授の吉良洋輔先生におかれましては、2018年9月16日、ご逝去されました。9月19日（水）に大分で葬儀が営まれ、御家族と御親族、多くのご友人に見送られて、安らかな眠りにつかれました。享年32歳でした。本センターを代表してセンター長の荻間澤が葬儀に参列しました。

吉良先生は四国での学会に出張後、9月12日から故郷の大分市の実家にて休暇をとっていました。9月16日（日）に、友人と魚釣りに出かけました。妹さんの婚約者が家に来るので、おもてなしの魚介類をとるために、友達と一緒に近くの海に出かけたとのことでした。吉良先生は猪苗代湖でも素潜りを楽しんでいましたが、そのときも素潜りで魚介類を採っていたとのことでした。ところが、海から上がってこないの、友人が心配して、「泳ぎに出た友人の行方が分からなくなった」と110番通報し、そして、翌朝17日（月）、午前8時ごろ、小黒漁港沖約500メートルの海底で、心肺停止状態で発見されました。

吉良先生は2016年10月に本学文化研究センターに「社会学」担当の准教授として着任されました。着任時から会津大学に職を得たことをとても喜んでいらっしゃいました。センター内ではご専門の「社会学」のほかに「文章表現法」の運営を担当されており、テキストの改訂や授業方法の提案などにとっても前向きに取り組まれました。また、学内委員のFD委員を担当して、学生による授業評価を授業改善に役立てるための方策の検討などを担当しておられました。利発で物怖じせず発言するので、多くの職員との交流がありました。ですから、吉良先生の研究室前に献花台には約3週間にわたり、台に載りきらない程の花がささげられておりました

私は吉良先生と着任時から気が合い、よく一緒に食事に出かけました。吉良先生は相談事があるときには「荻間澤先生、いっしょにご飯、食べに行きましょう！」と声をかけてくれました。ファミリーレストランで、アカデミックスキルのことやセンターのこと、大学のことなど、2時間以上も熱く語ったことも楽しい思い出です。最初に一緒に行ったのは大学の近くのラーメン屋さんでした。「とてもおいしいラーメン」と言って喜んでくれました。本当に気に入ったようで、そのお店をたくさんの友達に紹介して、足繁く通ったようです。先日、その店に行ったところ、店員さんが「先生のところの若い先生、亡くなられたんですか？明るくて気さくでいい先生だったのに残念です」とお話されていました。学内外で人気だった吉良先生が亡くなられて、とても寂しい気持ちです。

もっと一緒に仕事をしたり相談したりして、お互いに高め合っていたかったです。だから、葬儀で吉良先生のお顔を拝見した時、お別れの言葉よりも先に「おい、なに寝てるんだ！仕事あるぞ！」という言葉が出たのだと思います。亡くなられたことが、本当に残念でなりません。文化研究センター一同、吉良先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

吉良先生の突然のご逝去を悼んで

青木 滋之

私が吉良先生の訃報に接したのは、家でお風呂に入っているときに、突然妻が急ぎ足でやってきて、ネット上のニュースで報道されているのを私に告げた時でした。私は突然すぎて、当初はとても信じられませんでした。荻間澤先生が大分での葬儀に参列され、その仔細を私たちに話してくれた時に初めて、「本当に亡くなってしまったのだな」という、リアルな実感が湧きました。吉良先生の部屋の整理にも立ち会いましたが、部屋は先生が帰省される前のままの状態、ホワイトボードに貼られた付箋には、「〇月××日に打ち合わせ」というメモが残されたままでした。何とも言えない、打ちひしがれたような気分になりました。その後、突然の訃報についてのネット記事は、魚拓にとって保管していますが、なぜ吉良先生ほどの利発で、リスク勘案にも詳しい方が事故に遭われたのか、未だに納得がいきません。吉良先生の訃報に接した後、私は、「人間は、いつでも死んでしまうんだ」という所信を改めて強くしました。

吉良先生は、心から会津大学の未来を囑望され、会津大学を担って行かれる筈の方でした。29歳で准教授になられた気鋭の俊才で、数理社会学の立場から既存の社会学者を手厳しく批判されていたのが、鮮烈に記憶に残っています。また、アウトドア派で会津での生活をエンジョイされ、猪苗代湖でブラックバスを釣っては自分で料理をされることを、嬉々として語ってくれたことを思い出します。つい先週、学生と飲みに行ったところ、みな異口同音に吉良先生のことを惜しんでいました。大分のご実家に学生を泊めたという話まで聞き及び、本当に驚きました。もしご存命でしたら、全学規模での「学生が選んだベスト授業賞」に推されていたと聞きましたが、こうして社会現象や学生との付き合いに真摯で、肉薄されるような態度であったからこそ、学生からも非常に高い評価を得ていたのではないかと、私は解釈しています。

そんな吉良先生が突然逝去されたことは、大学及び私たちにとって大きな悲しみであり、大きな損失です。私は吉良先生のご専門に深く触れることはできませんでしたが、先生が執筆されたアカデミックスキルのテキストは、今後も保管し読み直していこうと思います。「ライティングの授業を受けて、人生が変わった」と吉良先生は度々仰っていましたが（そのことは、テキストの冒頭にも書かれています）、そうした経験を、吉良先生と同じく、熱く学生に伝えていければ、と思います。また、学部生の中には、吉良先生の授業に触発されて、社会現象を数理的に解明することに強い興味を覚えた者がたくさんいたと思いますが、残念なのは、吉良先生の居た時間があまりに短すぎて、卒論生を取り始めた頃に他界されてしまったことです。もしご存命であれば、院生まで取られていたのではないかと、私は推測しています。数理社会学の一大スクールが、会津大学に出現していたとしても、何ら不思議ではありません。31歳という若さで亡くなってしまったことが、そうした輝かしい可能性を摘み取ってしまったことが、実に残念でなりません。

吉良先生の率直で明晰な物言い、妥協を許さない態度、進取気鋭の精神、活動の澁刺さ、人間交友の豊かさ、そして会津大学への強い思い。こうしたものは、同僚の教員や大学スタッフ、学生たちに、何らかの仕方で影響し引き継がれていくものと思います。在りし日の吉良先生のことを思い起こしつつ、ご冥福をお祈りいたします。

4月からルーキーです

— 一定年退職のご挨拶 —

菊地 則行

1992年10月に会津大学の教職課程担当予定者として採用され、26年間の会津大学・会津地方での教育・研究生活でした。これまで400数十人の教職課程履修者と学びを共にしました。そのうち福島県を中心に教職の道に進んだ卒業生は百数十名になります。「ICTを利用した教育方法」をテーマとして、教職課程の学生の卒業論文の指導も行いました。また、教養科目の心理学では毎年100名前後の学生に心理学的な人間観を問いかけてきました。

文化研究センターの先生方をはじめとして多くの方々のおかげで職責を果たすことができました。本当にありがとうございました。

退職後は、仙台で3つのことを計画しています。

1つ目は、全国進路指導研究会の研究・実践の心理学的検討を論文としてまとめることです。在職中から継続している研究テーマです。これが終わらないうちは研究者として成仏できません。

2つ目は、数学の文化史的意味の勉強です。教職課程で数学教育の一端を体験することができたおかげで、数学に興味を持てるようになりました。私が生徒だったときには体験できなかった、数学の世界との美しい出会いを期待しています。

3つ目は、学習支援活動に参加することです。さまざま理由で学校での学習が保障されなかった子どもたちやおとなの方の勉強のお手伝いをさせていただきたいと考えています。

継続の活動も含めて新しい分野、人間関係のなかで新人として歩いていくことを楽しみたいと思っています。

退職のご挨拶

青木 滋之

会津大学には2009年秋に赴任しましたので、9年半ほど働かせて頂きました。文化研究センターの皆さま並びに大学、地域の皆さまには大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

思い起こせば、当時センター長だった太田先生に学内や公舎を案内して頂いたことに始まり、コンピュータ理工学部の学生相手の授業や、公舎の自治会長、初めての学内業務、初年次教育のワーキンググループ長など、戸惑い試行錯誤を続けながらも、様々な新しい経験を積むことができました。

ここ数年では、地域の社会教育委員として地元の多くの方々と直に触れ合うことが出来たのも、得難い経験です。研究では、大学院時代から西洋の哲学や科学ばかりに目がいていたのが、その日本における<受容>に関心が転換してきたのが、会津に来てからの大きな変化でした。

今後も、会津地域と接点を持ちながら、研究を続けられればと思っております。宜しくご指導、ご鞭撻頂ければ幸いです。